

的特徴(愛は～しない)は、①ねたまない(4節)、②自慢しない(4節)、③高ぶったりしない(4節)、④無礼な事をしない(5節)、⑤自分さえ良ければ良いとは考えない(5節)、⑥すぐに怒らない(5節)、⑦ひどい事をされても気にしない [人のした悪を思わない] (5節)、⑧不正を喜ばない(6節)という8つの特徴が示されました。

本当は創造主の聖霊様が与えて下さった賜物や奉仕など良いはずのものが、コリント教会の中では、愛なく用いられていたために、葛藤や軋轢の原因となってしまっていました。パウロは、せっかく与えられた霊的な部分がさらに生かされる道(方法)を具体的に語りました。愛に裏打ちされた共同体こそが、主に喜ばれる共同体となることができます。

(3)賜物三銃士・信仰三銃士(8～13節)

パウロは続いて、当時、コリント教会の中で重要視されていた3つの賜物と愛について語ります。8～9節では「預言の賜物」「特別な言葉で語る事(異言)」「知識の賜物」もいつかは廃れること、不完全なものである(9節)だと語ります。もちろん、このような賜物が大切でないとか、不完全なので求めなくても良いというわけではありません。しかし、パウロはこれらのものばかりを求めているコリント教会の姿を子供の姿と重ね合わせながら語りました。コリント教会の人々は、目立つ、賜物の優劣をつける為にこのような賜物を求めていました。しかし、パウロはその賜物の根底に流れる、その賜物をさらに生かすための「愛の賜物」を求めようとしてコリント教会に求めたのです。

13節では「いつまでも残るものは、信仰と希望と愛の3つである。この中で元も偉大なものは愛である」と語りました。この3つは、クリスチャンに絶対的に必要な三銃士の概念とも呼ばれているものです。信仰とは「イエス・キリストの十字架と復活を通して、罪人を救ってくださるというイエス様により頼むこと」で、希望とは「救いの完成を見上げて歩むこと」です。そして、愛は「キリストの十字架の愛に感謝し、創造主を愛し、隣人を愛すること」です。この中で、偉大なものは愛だと表現されているのは、信仰や希望は人間側にあるものですが、愛は創造主のご性質でもあるからです。

3 分かち合ってみましょう